

フロン漏えい検知システム

残量の推移を可視化

冷凍・空調設備設計、施工のナンバ（長岡市）は、業務用の冷凍設備や空調機器で冷媒に使われるフロンの漏えいを検知できるシステム「フロンキーパー」の改良版を開発した。フロンの残量を可視化するなどの改善を施した。2015年4月に全面施行される改正フロン回収・破壊法で設備使用者に漏えい量の報告義務が設けられることもあり、同社はスーパードや食品関連企業へ売り込む。

ナンバが改良版開発

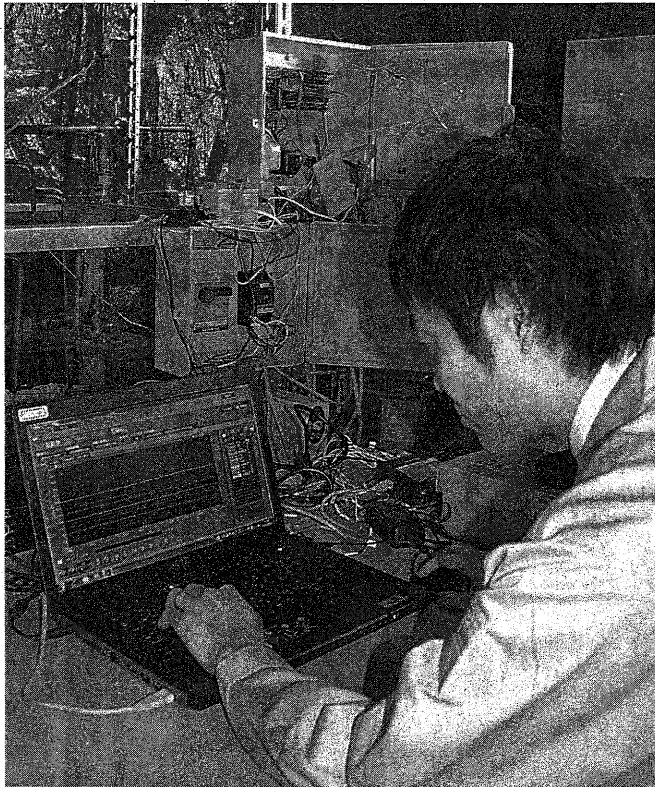
ナンバは12年にフロンキーパーを開発。冷凍・空調機のタンクにたまった液体フロンの液面が下がると、担当者に警報メールが送られる。オゾン層を破壊するフロンに加えて、それに替わる冷媒として1990年代から普及し、温室効果が極めて高い代替フロンの両方を

食品関連企業に売り込み

を検知できる。漏れを早期に見て取り除くため、漏えい箇所での修理の影響が小さく、コストなどの利点がある。従来は設定した高さで液面が達したかどうかしか検知できなかったが、今回の改良で液面の高さ自体を把握し、漏えい量が分かるようになった。また、高さの週

平均値を取ることで、気温などによる季節変動への対応も可能にした。

経済産業省によると、代替フロン排出量は2020



改良版のフロンキーパーを使い、設備内のフロン残量を確認するナンバのスタッフ（長岡市）

年までにほぼ倍増する見込み。改正フロン回収・破壊法では設備使用者にも管理責任が求められる。フロンの漏えい量、補充量の報告などが義務付けられる。改良版のフロンキーパーは改正法に対応できるため、需要が期待される。

フロンキーパーはこれまで

でに県内外で約50台が導入されたが、難波昇一社長は「社会全体の意識が低く、普及は進んでいない」と指摘する。その上で「改良版のフロンキーパーが適正管理に役立てればいい」と話した。

ナンバの13年10月期の売上高は14億7700万円。